

幼児による円環イメージ画と母親の養育態度との関連

夫馬 有梨・長屋佐和子

要 約

幼児を対象に円環イメージ画を実施し、幼児自身が感じる母子関係の特性と、実際の養育態度との関係について調査を行った。また、幼児に対する研究方法として、円環イメージ画の有効性についても検討を行った。

A 県内の B 幼稚園の年長組 49 名とその養育者に協力を依頼した。養育者には親の養育態度に関する質問紙を実施、園児には円環イメージ画を実施した。その結果、①女兒と比べて男児の方が親の統制が強い、②円環イメージ画では、男児と比べて女兒の方が親の円と子の円との距離が遠い、③親の統制が高いほど女兒による子の円が小さくなる傾向があることがわかった。これらの結果より、男児に対する母親の統制は女兒よりも強いが、母子間の距離は近く、子どもが心理的に委縮する傾向は見られなかった。これに対して、女兒に対する母親の統制は弱いにもかかわらず、母子間の距離が遠く、母親の統制の影響を受けて委縮しやすい傾向が見られた。

異性の親子間に生じる異性間効果により、母親が男児に対して寛大になりやすい傾向があることが指摘されている。このため、男児は母親の統制を重視せずに行動し、それによって母親の統制がより強まることが考えられる。これに対して母親と女兒の関係では、心理的距離が比較的遠く、母親の統制行動に対して敏感に反応しやすいと考えられる。本研究の結果、円環イメージ画は幼児に対する調査方法として有効であることが示された。

序 論

1. 養育態度と性差

親の養育態度は、時代、文化、地域などの社会的要因に加えて、親自身の生育歴、性格、価値観など親自身に関わる要因、子どもの性格、きょうだいの人数、きょうだい関係などの子どもに関わる要因、あるいは夫婦関係、親戚関係、仕事など、さまざまな要因の影響を受けて形成されると考えられる。特に、性差によって社会から期待される性格特性が異なることから、男女それぞれが特有の性格特性を学習していく。この学習における親の役割は重要であり、親が抱く男性観・女性観が大きく影響する。親自身も、その幼児期・児童期に当時の社会の男性観・女性観の影響を受けて成長し、さまざまな経験をすることによって、性差に関する概念を確立していく(稲田, 1985)。

子どもの攻撃性については性差が明らかで、男児は女兒よりも攻撃的行動が多いことが認められている。しかし、子どもの攻撃性に対する親の反応は複雑である。異性間効果、すなわち、父親-娘・母親-息子では反応に違いがあり、同性の子どもに対してよりも異性の子どもに対して寛大になる傾向があるとされる。親は、子どもには生得的に性差があり、その行動に対して性差を含む基準によって判断して、日々の養育を行っていると考えられる(稲田, 1985)。

2. 幼児に対する心理検査としての描画法

一般に、心理検査の主な方法として、質問紙法と投影法があげられる。質問紙法は、呈示された質問文に対して「はい」「いいえ」、あるいは当てはまる程度などを回答する形式で行われることから、比較的自由度が低い。これに対して、投影法では自由な反応が求められる。投影法には、呈示された絵や図などの刺激に対する反応が求められるロールシャッハ・テストや TAT、あるいは風景構成法・人物画などの描画法が挙げられる。

幼児期に実施する心理検査としては、描画法は最もふさわしい方法であると考えられる。幼児期の子どもの言葉と内省の発達水準では、自分の心的体験や心のトラブルを十分に自覚して伝達できないため、質問紙や言語的回答を求める投影法の施行は困難である。しかし、Sorokina (2008) によると、幼児期の子どもは、描画などの投影法の中に自らの内的な葛藤を、間接的に、しかし十分に情動がこもった形で表現することができる。このように、言葉の発達が未熟な幼児に対しては、投影法が最も有効な心理検査であると言える。

子どもの発達に伴って、その描画の特徴も変化する。描画の発達における初期段階は、なぐり描き期(錯画期・乱画期ともいう)と呼ばれ、無意味な線描である「なぐり描き」(scribble)を描く時期と位置付けられてきた。なぐり描き期は一般に約3歳までの時期を指し、描

こうと決めた対象を表現する以前の段階と特色付けられる(山形, 2000)。1歳前後になると線画を描き始めるが、まだ何かを表すことはできず、なぐり描きにとどまっている。1歳の間にはなぐり描きが優勢であるが、次第に自分の描こうと思ったものを描こうとする表象的描画が芽生える。2歳になると、対象を構成要素に基づいて表わそうとする構成活動がみられ、幾何学的線画(直線や円など)を描くようになる。このような構成的描画は2歳~2歳半の時期に急速に発達し、3歳には図式画が描けるようになる(山形・清水, 1997; 山形, 1999)。

なぐり描き期の分類方法に関して、いくつかの先行研究がある。Lowenfeld (1995) は2~4歳のなぐり描き期を(1)未分化ななぐり描き、(2)罫線または制御されたなぐり描き、(3)円形なぐり描き、(4)なぐり描きへの注釈の4つの段階に区分し、描画発達に注目している。

またEng (1999) は、自由な線描きで、何の表現でもなく、また装飾でもないなぐり描きの絵をスクリブル描きと定義し、スクリブル画の発達には明らかに区別できるいくつかの段階があるとしている。初期線画を(1)波形スクリブル、(2)円スクリブル、(3)ごちゃまぜスクリブル、(4)孤立したスクリブルの4つに分類し、描画初期段階に線画が一定の順序をたどって発達すると指摘している。

紙面上のどこにスクリブルが描かれるかを考えると、ここでもまた子どもの絵の初期段階を明らかに区別でき、かつ連続する3つの段階を見ることができる。これは(1)集中型スクリブル: 紙の中央部にスクリブルが集中して高い密度で繰り返し描かれる、(2)分散型スクリブル: スクリブルが紙面の全体にわたってばら撒かれ、スクリブル相互の間にはスペースがある。それらの線による形はきわめて簡単なものであるが、全体的にはまとまりがある、(3)孤立型スクリブル: 線や形があちらこちらに繰り返される、の3段階である(Cox, 1999)。

このように幼児の描画は発達し、3歳まではなぐり描きだが、3歳以上になるとある程度のまとまりを持った絵を描けるようになるため、幼児を対象とした研究法のひとつとして描画法を用いることは可能であると考えられる。

3. 描画に使用する色

前項に示したような、幼児による描画の構成や図式に関する研究と比較して、子どもの描画に使用される色に関する研究報告はあまり多くない。

Alschuler & Hattwick (2002) によると、2歳から5歳までの幼児の描画の色とストロークなどが子どもの心理状態と関連している。また、浅利(1956)は、すべての色の象徴的意味を発見すると共に、それらの象徴的意味は、写実的に色を使うようになる年齢以後の子どもたち、さらには大人にまでも適用されるものであると述べている。香川・長谷川(1997)は、これらの先行研究を統合し、赤・青・黄・緑・黒・橙・褐色・紫それぞれの色の意味について言及している。

それによると、(1)赤を軽いストロークで描く場合、他者と良好な関係性および協調性を示すが、重いストロークは愛情の不満・敵意・自己主張的行為と関係がある、(2)青は衝動的・感情的反応の統制、外部的規準に対する服従を示し、(3)黄は、幸福感、依存心、成長に抵抗する傾向、(4)緑は感情の欠如・意識的回避、(5)黒は恐怖・不安による圧迫感、あるいは感情の抑圧、(6)橙は順応性・内向性を示し、(7)褐色は汚れた願望、(8)紫は不幸な子どもたちが使用する傾向がある。このように、色にはそれぞれ異なった意味や使用する理由があるとされる(香川・長谷川, 1997)。

子どもの描画における色について検討することは、子どもの内的な世界について豊かな情報を与えてくれることが推測される。その反面、主観的な要因に対する十分な配慮も求められる。研究の実施時には、質問紙・行動観察等の外的な評価基準を併せて用いることによって、客観的な調査方法を用いる必要があると考えられる。

4. 円環イメージ画

描画法の中でも母子関係そのものを表現する手法として、円環イメージ画があげられる。これは、母と子に見立てたイメージ円によって、母子関係のイメージをとらえようとする投影法である。2つの円を描くという簡便な方法だが、母親の存在の大きさをあらわす「円の大きさ」や、関係の緊密さやつながりの深さをあらわす「円の包摂」といった独自の観点を備えている。また、円環

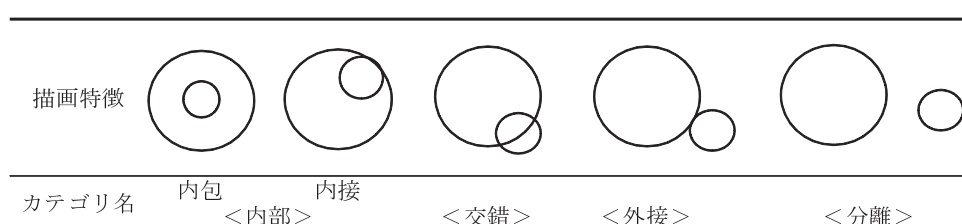


図1. 母子円環イメージ画の関係分類(松尾・小川, 1998)

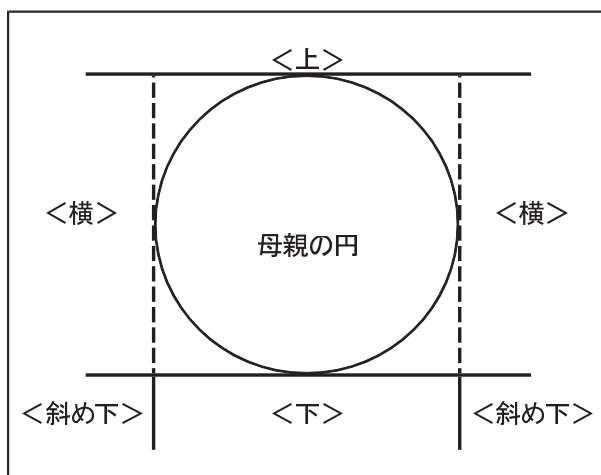


図2. 母子円環イメージ画の位置の分類基準(松尾・小川, 1999)

イメージ画の分析方法として、円環の関係(図1)、および円環の位置(図2)に関する分類基準が作成されている(松尾・小川, 1998; 1999)。

円環同士の関係について、大学生を対象とした幼児期の円環イメージ画の研究を行った松尾・小川(1998)は、自分の円を母親の円の上に描く者が極めて少ないことを報告している。また、小川・松尾(1999)が大学生と中学生に対して行った円環イメージ画に関する研究では、中学生の62.5%、大学生の50.5%が自分の円と母親の円を横並びに描いている。自分の円を母親の円の上に描くことは、親に対する疎ましさや反抗などの否定的傾向が投影された可能性があり(松尾・小川, 2000)、自分の円を母親の円の下に描くことは、子どもにとって母親が見上げる存在だったことを暗示している(松尾・小川, 1998)。また、円の大きさが等しいこと、位置が横並びであることは、親と対等であるという意識を示すとされる(松尾・小川, 2000)。

五十嵐(2009)は、大学生の「現在」に焦点を当て、愛着との関連を検討している。父母双方に対して安定した愛着関係を形成している者は、円同士が交差するイメージ画を多く描き、分離の円をあまり描かないことが示された。不信感を伴う関係については、円環イメージ画について、これと逆の傾向が認められたと報告している。

母子円の大きさや円間の距離に関する研究では、母親の円よりも子の円を大きく描いたものは「安心・依存」が低く、「不審・拒否」が高いとの報告がある(五十嵐・萩原, 2008)。また、宮本・佐藤・北本(2001)は、女子大生を対象に「幼い頃」と「現在」の円環イメージ画を実施した結果、「幼い頃」では母子の円の距離が近く、「現在」では母子の円が離れるという変化が認められたと報告している。子の円と親の円との距離は、親子間の心理的距離を表現するものであり(松尾・小川, 2000)、

親子間の距離が遠いものは、近いものと比べて、親への安心や依存が低い傾向がある(五十嵐, 2009)。

このように、円環イメージ画を用いて親子関係について検討した研究は、主として中学生～大学生を対象に行われている。しかし、前述の通り、描画法は幼児期に適した投影法であることから、より低年齢の子どもへの施行についても検討する必要があると考えられる。

5. 本研究の目的

乳幼児期の母子関係に関する研究では、子どもの親イメージについて直接捉える事が困難であることから、親・保育者などに対する調査や、行動観察による研究が行われることが多い。しかし、幼児に対して描画を施行することによって、大人から見た子どもの様子から推測するのではなく、子ども自身がイメージしている親子関係を捉える事が可能である。特に、円環イメージ画法は、施行の簡便さ、距離・位置・大きさなどの客観的評定が行えることから、より正確な母子関係性の把握が可能である。

本研究では、幼児を対象に円環イメージ画を実施し、幼児自身が捉えている母子関係について調査を行う。また同時に、母親の養育態度の調査を行うことによって、養育態度と、子どもが感じる親との関係性について検討する。このような検討を行うことによって、大人によって行われる評価にとらわれず、子どもと親との関係をより明確に示すことが期待される。さらに、円環イメージ画の幼児に対する施行可能性および問題点についても検討を行う。

方 法

1. 協力者

A県内のB幼稚園、年長組49名とその親に協力を依頼した。

2. 材料

(1) 円環イメージ画: A4用紙、色鉛筆8色(赤・青・黄・緑・黒・橙・茶色・紫)を使用した。

(2) 親の養育態度尺度: 親の養育態度に関する22項目からなる質問紙(中道・中澤, 2003)を使用した。子供に対する統制に関する項目11項目、子供に対する応答性に関する項目11項目、計22項目で構成された、4段階評定の質問紙であった。

3. 手続き

(1) 質問紙調査: 母親に対して質問紙調査を実施した。封筒に質問紙と研究目的の説明を同封し、幼稚園職員に配布・回収を依頼した。配布枚数49、回収数45、有効回答数31であった。

(2) 円環イメージ画: 園児に対して個室で個別に実

施した。机の上に用紙と色鉛筆を用意し、入室した園児に対して「今から、この色鉛筆で紙にあなたとお母さんを円で描いてもらいます。まずあなた自身を描いてもらいますので、色鉛筆を一本選んでください。では、あなた自身を円で描いてください。」と教示した。描画終了するまで待機し、「お母さんを描いてもらいます。色鉛筆を一本選んでください。では、お母さんを円で描いてください。」と教示し、同様に円を描くまで待機した。

描画終了後、「どうして○色で自分の円を描いたのですか?」、「どうして○色でお母さんの円を描いたのですか?」と質問し、回答を記録した。

4. 分析方法

園児の円環イメージ画は、関係・位置・距離・大きさについて分析を行った。母子を示す円の関係は内部・交錯・外接・分離に分類し、位置は上・横・下・斜め下の四つのカテゴリーに分類、距離は母子を示す各円の中心点の間の直線距離を測定した。

5. 倫理的配慮

協力者に対して、データは研究以外の目的で使用しな

いこと、統計的な処理を行うため、個人に関する情報が特定されるかたちで結果が公表されないこと、また、調査への参加は任意であり、途中で中止しても不利になることはないことを文書で説明した。

結 果

本研究では、幼児自身がとらえる母子関係の特性と、実際の養育態度との関係について検討するために、円環イメージ画および親の養育態度尺度を用いて調査を行った。

1. 養育態度

子どもの性別による養育態度の差について検討するために、*t*検定をおこなった(表1)。その結果、男児の親の統制が女兒の親の統制よりも有意に高いことがわかった。

2. 円環イメージ画と性差との関係

子どもの性別による円環イメージ画の面積・距離の差について検討するために、*t*検定をおこなった(表2)。その結果、子どもの性別によって、子の円と親の円の距離が異なり、女兒のほうが男児よりも母子円の距離が遠い傾向が認められた。

表1. 子どもの性別による養育態度尺度平均値の差

	N	養育態度			
		応答性		統制	
		平均	S D	平均	S D
男	10	26.70	2.91	28.80	1.48
女	21	25.38	2.65	27.00	1.79
t 値		1.25		2.76 *	

* p<.05

表2. 子どもの性別による描画面積平均値の差

	N	子面積		親面積		距離	
		平均	S D	平均	S D	平均	S D
男	10	40.20	30.19	40.99	35.88	9.35	3.16
女	21	43.07	29.46	48.85	37.45	11.75	3.16
t 値		-.25		-.55		-1.98 +	

+ p<.10

表3. 養育態度尺度と円環イメージ画における色の使用頻度

		黒		赤		黄		青									
		子	親	子	親	子	親	子	親								
応答性	高	3	9.7%	1	3.2%	2	6.5%	6	19.4%	5	16.1%	1	3.2%	1	3.2%	2	6.5%
	低	0	0.0%	2	6.5%	2	6.5%	4	12.9%	5	16.1%	3	9.7%	2	6.5%	1	3.2%
統制	高	2	6.5%	0	0.0%	3	9.7%	7	22.6%	7	22.6%	2	6.5%	2	6.5%	1	3.2%
	低	1	3.2%	3	9.7%	1	3.2%	3	9.7%	3	9.7%	2	6.5%	1	3.2%	2	6.5%
合計		3	9.7%	3	9.7%	4	12.9%	10	32.3%	10	32.3%	4	12.9%	3	9.7%	3	9.7%

		褐色		緑		橙		紫							
		子	親	子	親	子	親	子	親						
応答性	高	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	9.7%	3	9.7%	3	9.7%	4	12.9%
	低	0	0.0%	1	3.2%	2	6.5%	1	3.2%	0	0.0%	1	3.2%	3	9.7%
統制	高	0	0.0%	1	3.2%	2	6.5%	0	0.0%	3	9.7%	2	6.5%	4	12.9%
	低	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.2%	3	9.7%	1	3.2%	4	12.9%
合計		0	0.0%	1	3.2%	2	6.5%	1	3.2%	3	9.7%	4	12.9%	5	16.1%

3. 円環イメージ画と養育態度との関係

円環イメージ画および親の養育態度に性差が認められたため、子どもの性別別に、円環イメージ画と養育態度尺度との関係について検討を行った。

描画の面積および距離と親の養育態度の関係について Pearson の相関分析をおこなった結果、女兒の場合、親の統制と子の円の面積との間に負の強い相関が認められた ($r=-.497, p<.05$)。すなわち、親の統制が強い場合、女兒による子の円は縮小する傾向があった。

4. 母子円の位置関係

円環イメージ画の関係分類を行った結果、母子円間の内部・交錯・外接は全くみられず、分離のみであった。

母子円の位置関係について、松尾・小川 (1999) による分類基準に基づいて分析を行った。その結果、母子の円を横に描いたものが 38 名 (90.5%)、母親を上の方に描いたものが 2 名 (4.8%)、母親の円を自分の円の下あるいは斜め下に描いたものは各 1 名 (2.4%) となった。

このように、母親を示す円と自分を示す円を横並びに描く幼児が大多数を占め、母親を自分の上方あるいは下方に描く幼児は少ない傾向が見られた。

5. 描画に使用された色

子どもが描画に使用した色について、応答性・統制それぞれの平均値によって高群・低群の 2 群に分けて集計した。子の円と親の円の描画に使われた色の頻度と割合を表 3 に示す。

子の円の色の使用頻度では、黄色が 10 名 (32.3%) と最も高く、次いで紫 (6 名, 19.4%)、赤 (4 名, 12.9%) となった。親の円の色の使用頻度では、赤 (10 名, 32.3%) が最も高く、次に紫 (5 名, 16.1%)、橙・黄 (4 名, 12.9%) の順となった。

描画に使用された色と養育態度尺度の応答性・統制の各得点について χ^2 検定を行ったが、いずれも有意差は認められなかった。

考 察

親の養育態度における子どもの性差が与える影響について分析したところ、男児の親の養育態度のほうが女兒の親の養育態度よりも統制が強いことがわかった。この結果は、親は同性の子どもに対してよりも、異性の子どもに対してより寛大な傾向がある (稲田, 1985) とする先行研究と矛盾している。男児の母親が統制の強い養育を行うということについては、心理的距離と円環イメージ画の結果も考慮して考察する必要がある。

次に、円環イメージ画の面積・距離における性差を比

較したところ、男児よりも女兒の方が、子の円と親の円の距離が遠い傾向があることがわかった。前述したように、子の円と親の円との距離は、親子間の心理的距離を表現するものである (松尾・小川, 2000)。また、親子間の距離は親への安心や依存と関係があり、距離が遠い場合は安心・依存が低い傾向を示す (五十嵐, 2009)。本研究の結果より、男児よりも女兒の方が母親に対する安心感や依存度が低く、親子間の心理的距離が大きいことが示唆された。

これらの結果は、母親と男児は心理的距離が近いだけでなく、より統制の強い育児、言い換えれば干渉的な育児が行われやすいことを示している。これに対して母親と女兒では、心理的距離が比較的遠く、女兒の安心感・依存度も低い結果となった。母親と女兒の場合、子どもの自立を促す養育が行われ、その結果、女兒と母親の心理的距離が遠くなり、依存度が低くなる傾向があることが推測される。

続いて描画の面積および距離と親の養育態度の関係について分析を行ったところ、女兒の場合、親の統制が強いほど子の円の面積が小さくなる傾向があることが示された。女兒は母親との心理的距離が遠く、安心感が低い傾向があるため、母親からの統制が強まることによって不安が喚起され、心理的に委縮したのではないかと考えられる。

これらの結果から、男児の方が女兒に比べて親の統制は強いが、女兒の方が親からの統制の影響を強く受けていることが明らかとなった。女兒は男児よりも母親との心理的距離が遠く、安心感が低い親子関係にあるため、親による統制は子を委縮させる可能性がある。一方、母親と男児の関係では、異性間効果によって心理的距離は近くなり、子どもが親との関係性に対して安心感を持っていることから、親からの統制を重視しないと推測される。このため、男児に対する母親の統制がより強まる可能性も指摘される。

また、母子円の位置関係の分類では、ほとんどが分離した横並びで描かれ、内部・交錯・外接は全くみられなかった。中学生の 62.5%・大学生の 50.5% と比較して、幼児の母子円では横並びに描かれたものが 90.5% と非常に多い。幼児の母子関係は比較的単純であり、思春期・青年期の自立・反抗のような複雑な心理状態にはないことを示すと考えられる。これらのことから、幼児に対する円環イメージ画では、円同士の関係や位置による分析は適さないと考えられる。

描画に使用された色の分類の結果、子の円では黄、親の円では赤の使用頻度が高かった。Alschuler &

Hattwick (2002) によると、黄とは幸福感・依存心・依頼心をあらわすとある。幼児が自らを示す円に黄色を使用することは、幼児期の心理状態と矛盾しないと考えられる。また、赤は健全な適応・協調性、愛情の不満・敵意・自己主張をあらわすとされることから (Alschuler & Hattwick, 2002), 子がイメージする親とは、優しく協調的な側面も持ちつつ、時にはしつけ等のために主張し怒りを示す、葛藤的な対象なのであろう。

また、幼児が親の円を描く際に赤を使用した理由には、「お母さんが好きそうな色だから」(6歳女児)、「お母さんの好きな色」(5歳女児)、「かわいいから」(5歳男児) など肯定的で一面的なものが多く見られた。このように、幼児の言語的反応は表層的であることから、調査手法として言語的な手法を選択することは適切とは言い難い。本研究で示したように、幼児に対する調査手法としては、実施が簡便で幼児に負担を与えないこと、数値化により統計的検定が可能であることの2点の理由から、描画法の中でも円環イメージ画が有効であると考えられる。

本研究の目的は、実際の幼児を対象に円環イメージ画を実施し、幼児自身がイメージする母子関係と、実際の養育態度との関連性について検討することであった。本研究では、円環イメージ画によって得られた円の色、大きさ、形、円間の距離などに示される特徴から、幼児が感じている母子関係の把握が可能であることが示唆された。今後の研究では、描画に使用する色、検査者との関係性、描画環境など、多数の要因を統制することによって、幼児期の親子関係に関するより明確で豊かな所見が得られることが期待される。

引用文献

- 浅利篤 (1956) 児童画の秘密 黎明書房.
- Alschuler, R. H. & Hattwick, L. B. W. 鳴崎清海(訳) (2002) 子どもの絵と性格 文化書房.
- Cox, M. V. 子安増生(訳) (1999) 子どもの絵と心の発達 有斐閣.
- Eng, H. K. 深田尚彦(訳) (1999) 子どもの描画心理学：初めての線描き(ストローク)から、8歳時の色彩画まで 黎明書房.
- 五十嵐哲也 (2009) 円環イメージ画にあらわれる大学生の親子関係表象—愛着との関連からの検討— 愛知教育大学研究報告, **58**, 51-59.
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2008) 円環イメージ画にあらわれる中学生の親子関係イメージと愛着との関連 北海道情報大学紀要, **19** (2), 27-38.
- 稲田準子 (1985) 親の養育態度と子どもの性 日本保育学会(編) 家庭の養育態度—保育学年報 1985年版 フレーベル館, p 55-62.
- 香川勇・長谷川望 (1997) 子どもの絵が訴えるものとその意味 黎明書房.
- Lowenfeld, V. 竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄(訳) (1995) 美術による人間形成：創造的発達と精神的成長 黎明書房.
- 松尾和美・小川俊樹 (1998) 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(1) 日本心理学会第62回大会発表論文集, 278.
- 松尾和美・小川俊樹 (1999) 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(2) —「幼い時」と「現在」の母子関係をあらわす二枚のイメージ画の比較から— 日本心理学会第63回大会発表論文集, 880.
- 松尾和美・小川俊樹 (2000) 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(3) —イメージ円の関係にあらわれる母親との心理的距離について— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1075.
- 宮本邦雄・佐藤かおり・北本桜香 (2001) 女子大学生の内的作業モデルと家庭表象：家族描画と円環母子関係イメージ画を指標として 東海女子大学紀要, **21**, 67-77.
- 中道圭人・中澤潤 (2003) 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部紀要, **51**, 173-179.
- 小川俊樹・松尾和美 (1999) 現代の中学生のもつ母子関係イメージの検討 —円環母子関係イメージ画を用いて— 研究助成論文集, 80-89.
- Sorokina, V. V. 中村和夫・伊藤美和子(訳) (2008) 小学生の心のトラブル：描画投影法による診断と治療 新読書社.
- 山形恭子 (1999) 発達初期における表象的描画の成立過程 臨床描画研究, **XIV**, 6-19.
- 山形恭子 (2000) 初期描画発達における表象活動の研究 風間書房.
- 山形恭子・清水麻紀 (1997) 初期描画発達における構成活動の成立過程 教育心理学研究, **45** (1), 22-30.

謝 辞

本研究の調査依頼を快く受け入れてくださった東海第一幼稚園の園長先生をはじめ、先生方、職員の皆さま、園児の皆さま、アンケートに協力してくださった園児の保護者の皆さまに深謝いたします。

この論文を書くにあたり、本当にたくさんの方々にご協力して頂きました。その全ての方々にご心からお礼を申し上げます。

付 記

本研究は東海学院大学人間関係学部心理学科 2011年度卒業論文「幼児による円環イメージ画と母親の養育態度との関連(夫馬有梨)」として提出された論文に加筆・修正したものである。